Habu, Junko, 1987: Regional differences in Moroiso-b style pottery [Bishi teki ni mita doki keishiki no chiikisei: Moroiso-b shiki doki]. Archaeological Quarterly [Kikan Kokogaku] 21: 40-44.

微視的にみた土器型式の地域性

諸磯b式土器

東京大学助手
羽生淳子
(はぶ・じゅんこ)

諸磯b式土器を構成する特定の属性に注目して土器分類を行ない，各群の出現率を比較することによって地域差が指摘できる

従来の縄文土器研究の主流は，編年研究であり，地域差の研究も，より精密な編年網を作成するという視点から行なわれることが多かった。しかし，土器研究の可能性は，編年研究だけに限定されるわけではない。

文様・形態などの土器の諸属性は，先史時代人の観念を反映するものであり，それ自体，先史時代の文化と社会を考える際の有力な手がかりである。とくに，同一ないし類似した属性を有する土器が一定の時・空間的広がりを持つ複数の遺跡から出土するという事実は，土器自体が一つの文化表象となり得ることを示すと同時に，各遺跡においてそれらの土器を製作・使用した集団の間に，直接的・間接的な交流が存在したことを示す。したがって，遺跡間の土器の類似と相異を調べ，得られた結果に検討を加えることによって，遺跡間の交流や集団のあり方などに関して，遺跡分布論や集落論とは異なる視点から復元を試みることが可能である。

このような視点に立ち，ここでは，諸磯b式土器を例として，同一型式内における地域差をどのような形で捉えるか，また，それが，従来の編年研究とどのように関わるのかについて考える。

1　編年研究の概略と諸磯b式土器のヴァリエーション

諸磯b式土器の時間的変遷については，今村啓爾と鈴木敏昭による研究がある[1,2]。両氏の研究は細部では異なるが，大まかな流れとしては一致する。ここでは，今村の記述に従い，細分型式として，諸磯b式古段階，中段階，新段階の三区分を用いる。

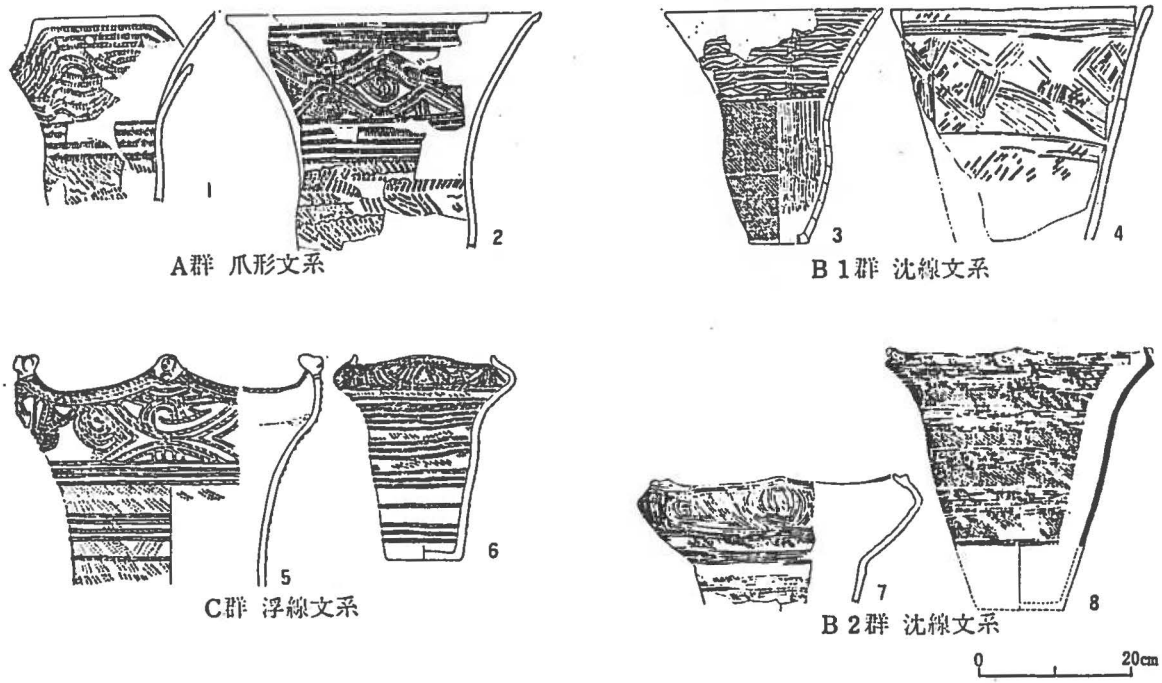

図 1　諸磯b式土器
1·2 鷲沼1住，3 多摩ニュータウンNo.457.3住，4 細田9住，5 北前1住，6 塚屋70号土壙，7.東光寺裏7住，8 阿久72住

これらの土器は，施文技法から見た場合，沈線文系，爪形文系，浮線文系，の３つに大別される。b式古段階は，爪形文系土器（A群，図 1—1·2）およびこれと器形・文様構成の点で類似する沈線文系土器（B１群，図 1—3·4）を組成の中心とし，b式中段階と新段階は，浮線文系土器（C群，図 1—5·6）およびこれと類似する沈線文系土器（B２群，図 1—7·8）を中心とする。各群の特徴を以下に記す。

A群：爪形文系土器　半截竹管を用いて平行沈線を描き，その中に同一施文具によって連続的な爪形の刺突を加えた，いわゆる連続爪形文によって主文様が施されている深鉢形土器を本群とする。平行沈線が省略されて，爪形文のみが施される場合も本群に含める。

器形は，朝顔形に開くものが大部分を占めるが，ごくゆるいキャリパー形を呈するものもある。前者には，平縁ないし二単位波状縁（波頂部がゆるいカーブを示す——図 1—1）が多く，後者には四単位の山形波状縁が多い。胴部は，いったんゆるくくびれてから開く器形と，直線的に立ち上がり，そのまま上部へ外反するものとがある。

主文様は，口縁部から胴上半部にかけて施され，その上限と下限は，通常，横走する連続爪形文によって区画される。区画帯の内部には，全面にわたって曲線的な文様が施される場合と，内部をいったん三角形ないし菱形に区画し，その中に種々のモティーフを充填する場合とがある。

B１群：沈線文系土器　半截竹管を用いた平行沈線文によって主文様が施される深鉢形土器のうち，器形・文様構成がA群と類似する土器を本群とする。胴上半部文様帯の内部には，波状文を数段にわたって施すもの，三角形や菱形の区画を施すもの，斜行線や木葉状の図形を乱雑に描くものなどがある。B２群土器に比して，平行沈線の幅は広く，おおむね５mm 以上である。

C群：浮線文系土器　器面に細い粘土紐を貼付する，いわゆる浮線文を用いて主文様を施した深鉢形土器を本群とする。浮線上には，ヘラ状工具による刻み目が施されることが多いが，縄文が施文されたり，無文のまま残されたりする場合もある。

器形は，四単位波状縁でキャリパー形のものが大部分を占める。とくに，新しい時期に位置づけられる資料では，キャリパー形の湾曲度が強まる傾向がみられる。

主文様は口縁部付近に集中するが，胴下半部まで数条一組の横位浮線が付されるため，文様帯の下限は不明確である。口縁部付近に施される文様のモティーフは，出現期には蕨手状や弧状のもの

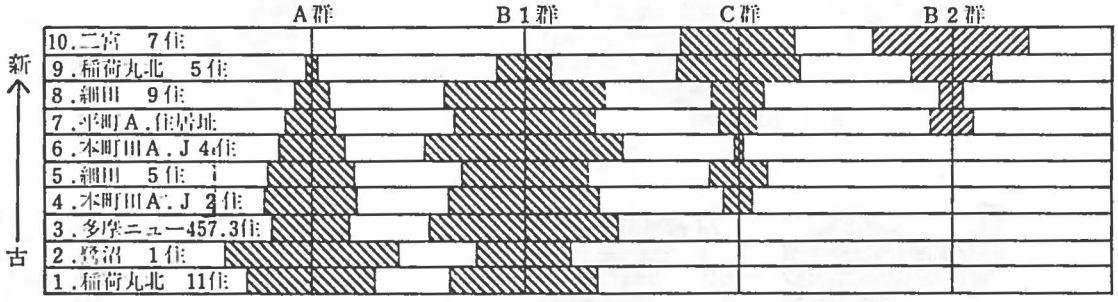

図 2　関東南部地域における各群別組成比の推移（横軸は%）

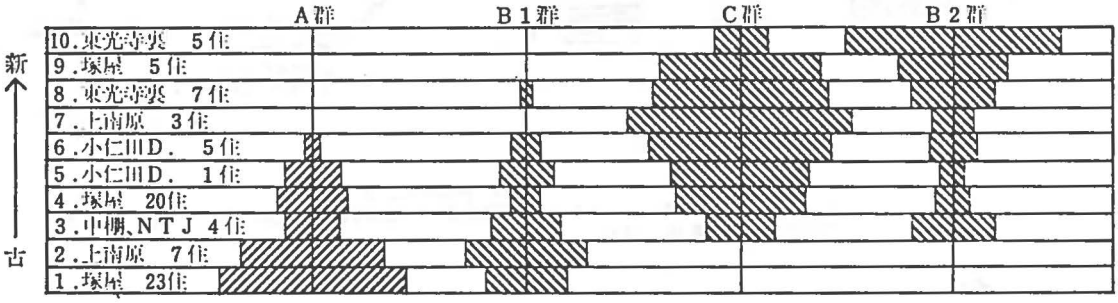

図 3　関東北西部地域における各群別組成比の推移（横軸は%）

もみられるが，最盛期では渦巻文ないしそれに近い曲線図形を充填するのが一般的である。さらに新しいタイプになると，こうした特徴的なモティーフは消失し，横位浮線だけが施されるようになる。

B２群：沈線文系土器　半截竹管を用いた平行沈線ないし集合沈線文によって主文様が施される土器のうち，器形・文様構成がC群と類似する土器を本群とする。B１群に比して平行沈線の幅は狭く，おおむね5mm未満である。

諸磯b式土器の深鉢形土器には，このほかに，縄文のみを有する土器，無文土器，その他上記のいずれの群にも分類し得ない土器が存在する。また，深鉢形土器のほかに浅鉢形土器もある。しかし，量的に主体を占めるのはここに示した四群である。

前述のように，諸磯b式古段階はA群・B１群を組成の主体とし，諸磯b式中段階・新段階はC群・B２群を組成の主体とする。このことから考えると，各遺跡における各群の出現率は，時間的要因によって決定されているように思える。しかし，実際の資料で各群の出現率を調べてみると，時間差だけでは説明しきれない差異が認められる。ここでは，関東南部地域と北西部地域の資料を比較し，地域差が認められるか否かを検討する。

2　各群別組成比からみた同一型式内の地域差

図２・３は，関東南部地域と，関東北西部地域のそれぞれの遺跡から，土器片の出土量の多い住居址内一括資料を選び，A群，B１群，C群，B２群の四群の土器の口縁部個体数（長さ5cm未満の資料は除く）および出現率を求めて，これを，セリエーションという方法によって，推定される時間的順序に並べたものである。原データを表１・２に示す。また，遺跡の分布図を図４に示す。セリエーションとは，アメリカ考古学において，複数の一括資料を時代順に並べるために考案された古典的な手法である[9]。まず第一に，各資料における各群の遺物の出現率を求める。次に，その値を図化して，横長の紙片に記入する。そして，各群の遺物の時間的消長が，図上で紡錘形を示すと仮定した上で，でき上がるセリエーション図がもっとも矛盾のない推移を示すように紙片を上下に動かし，各資料の時間的前後関係を決定する。もちろん，実際の資料では，すべての群がきれいな紡錘形を示すことは稀であるし，個々の遺跡の前後関係については決定しかねる場合も多いが，各土器群の大まかな量的変化を把握するのには有効な方法である。

図２・３における各群の消長を比較すると，両地域とも，時間とともにA群が減少し，C群が増加する点では共通する動きを示している。しかし，沈線文系土器に注目してみると，関東北西部地域では，B１群はA群とほぼ一致する動きを示し，両群の減少にともなって，C群とB２群が徐々に増加するのに対し，関東南部地域では，A群が減少しても，B１群は減少する傾向をみせない。そして，A群の減少期における両地域のC群土器の割合を比較すると，関東南部地域の資料では，関東北西部地域の資料に比して，C群土器は全体の中で小さい割合を占めるにすぎない。

表１　関東南部地域の資料における各群土器の出土点数　（　）内は%

資料名	A群	B1群	C群	B2群	計
1. 稲荷丸北　11住	6(46.2)	7(53.8)	0	0	13(100.0)
2. 鷺沼　1住	28(65.1)	15(34.9)	0	0	43(100.0)
3. 多摩ニュー457. 3住	5(29.4)	12(70.6)	0	0	17(100.0)
4. 本町田 A. J2住*	6(33.3)	10(55.6)	2(11.1)	0	18(100.0)
5. 細田　5住*	13(31.0)	20(47.6)	9(21.4)	0	42(100.0)
6. 本町田 A. J4住*	9(23.7)	28(73.7)	1(2.6)	0	38(100.0)
7. 平町 A. 住居址	8(17.8)	24(53.3)	6(13.3)	7(15.6)	45(100.0)
8. 細田　9住*	7(12.3)	34(59.6)	11(19.3)	5(8.8)	57(100.0)
9. 稲荷丸北　5住*	2(4.2)	10(20.8)	22(45.8)	14(29.2)	48(100.0)
10. 二宮　7住*	0	0	5(41.7)	7(58.3)	12(100.0)

表２　関東北西部地域の資料における各群土器の出土点数　（　）内は%

資料名	A群	B1群	C群	B2群	計
1. 塚屋　23住	12(70.6)	5(29.4)	0	0	17(100.0)
2. 上南原　7住	7(53.8)	6(46.2)	0	0	13(100.0)
3. 中棚NTJ　4住*	4(20.0)	5(25.0)	5(25.0)	6(30.0)	20(100.0)
4. 塚屋　20住	11(26.8)	5(12.2)	20(48.8)	5(12.2)	41(100.0)
5. 小仁田 D.　1住*	7(20.0)	7(20.0)	18(51.4)	3(8.6)	35(100.0)
6. 小仁田 D.　5住*	1(5.3)	2(10.5)	13(68.4)	3(15.8)	19(100.0)
7. 上南原　3住	0	0	11(84.6)	2(15.4)	13(100.0)
8. 東光寺裏　7住*	0	2(4.3)	30(65.2)	14(30.5)	46(100.0)
9. 塚屋　5住	0	0	16(59.3)	11(40.7)	27(100.0)
10. 東光寺裏　5住*	0	0	7(20.0)	28(80.0)	35(100.0)

＊は報告書図版からデータを作成。他は資料を実見。

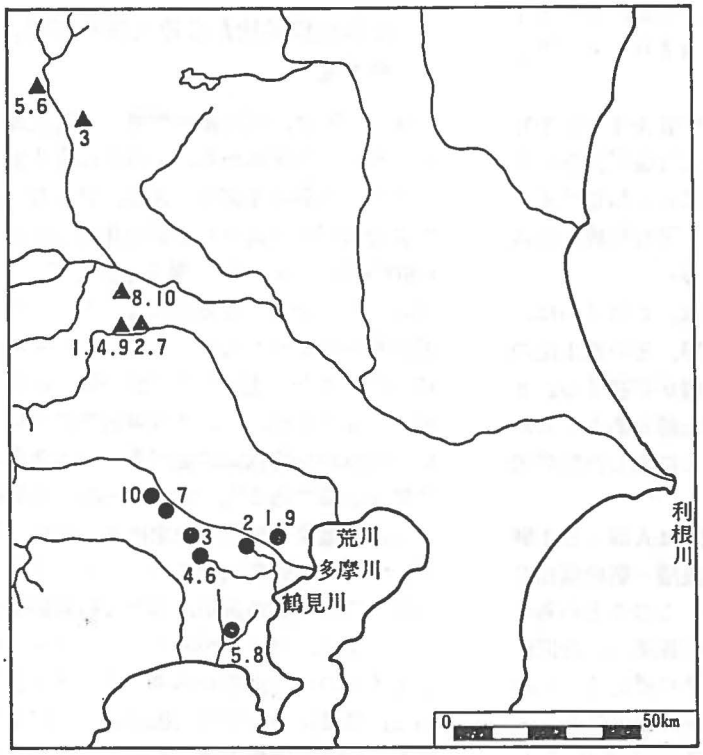

図 4　遺跡分布図
●は関東南部地域，▲は関東北西部地域の遺跡をあらわす。
数字は表 1・2 の資料番号と一致する。

3　地域差と時間差

以上の事実から，各群別の組成比の時間的変化は，両地域において異なる動きを示すことがわかった。すなわち，関東北西部地域では，組成の中心は，A群・B１群からC群・B２群へとスムーズに変化するのに対し，関東南部地域では，A群・B１群→B１群→C群・B２群という変化が認められる。従来の編年でいえば，A群とB１群を主体とする資料は諸磯b式古段階に相当し，C群とB２群を主体とする資料は諸磯b式中段階と新段階に相当する。したがって，関東南部地域では，諸磯b式古段階に位置づけられる資料が，さらに新旧二段階に細分し得ることになる。

関東南部地域では，A群の減少期における組成の主体はB１群であるのに対し，関東北西部地域では，A群の減少とともにB１群も減少し，C群が増加している。ここで，両地域においてA群の減少が同時に起こったと仮定するならば，関東南部地域におけるB１群を主体とする資料と，関東北西部地域におけるC群を主体とする資料が，時間的平行関係にある可能性を指摘できる。すなわち，C群土器は，関東北西部地域において，関東南部地域よりも先に組成の主体を占めるようになったと考えることができる。

C群とB２群は，器形・文様の点で，それ以前の諸磯式土器とは非常に異なる特徴を有する土器群である。A群とB１群の器形および文様構成は，基本的には，それ以前の土器（諸磯a式）の延長線上として理解できるのに対し，C群のキャリパー形の器形は，A群・B１群と著しく異なっている。また，文様構成の点でも，上半部に主文様帯，下半部に縄文ないし無文という従来の構成が大きく変化し，数段にわたる横方向の区画が施されるようになる。B２群土器の器形・文様構成も，C群と同様の特徴を有している。したがって，型式学的にみれば，A群・B１群はC群・B２群に比して，より古い系統に属する土器である。それにもかかわらず，上記のような結果が得られたことは，A群・B１群からC群・B２群への移行が，両地域において一様に起こったのではないことを示す。すなわち，二つの地域では，型式学的にみて類似した特徴を示す土器に，異なる時間的位置づけが与えられる可能性がある。

従来の型式学的方法に基づいた編年研究では，編年の横軸としての地域を限定した上で，その中における土器の諸属性の差異を時間的変化として説明してきた。しかし，上記の結果は，型式学的にみた時間差が，地域差と密接な関係にあることを示すものである。すなわち，ごく短い時間内に資料を限定した上で資料間の土器の差異を比較するならば，従来の土器編年において時間的変化の指標と考えられてきた属性を，微細な地域差の指標として用い得る可能性もある。

4　同一型式内における地域差の解釈

以上示した，関東南部地域と関東北西部地域における土器の差異は，諸磯b式という一型式の内部における，いわば型式よりも下位レベルでの差異である。このような，一型式内における地域差について，その意味を具体的に論じた研究はあま

東北西部地域に
域よりも先に組
うになったと考

器形・文様の点
式土器とは非常
る土器群であ
器形および文様
，それ以前の土
線上として理解
群のキャリパー
Ｂ１群と著しく
文様構成の点
様帯，下半部に
う従来の構成が
にわたる横方向
うになる。Ｂ２
構成も，Ｃ群と
いる。したがっ
ず，Ａ群・Ｂ１
比して，より古
である。それに
のような結果が
らＣ群・Ｂ２群
こ起こったので
つの地域では，
す土器に，異な
能性がある。
編年研究では，
た上で，その中
間的変化として
果は，型式学的
関係にあること
く短い時間内に
の差異を比較す
て時間的変化の
細な地域差の指

の解釈

東北西部地域に
いう一型式の内
立レベルでの差
における地域差
じた研究はあま

り多くはないが，その一つとして鈴木公雄による安行式土器の研究がある[4]。

鈴木は，土器型式の分布圏を，①「大略同一の土器を使用することを共通の意志とする集団」に関わるもの，と定義する。そして，一型式分布圏内の地域差については，②「①のような意志に包まれつつも，その中の一部に独自の意志を持ちえた集団」の存在を示すものと考える。

一型式内における地域差が，集団の独自の意志を反映するものか，あるいは土器の製作者にとっては非意図的なものであったかを知り得る手がかりは少ない。しかし，複数の遺跡から類似する土器が出土する，という事実は，少なくとも，その遺跡間に何らかの形で直接的・間接的な交流が存在したことを示す。ここで，遺跡間の土器の類似の度合は交流の疎密を反映する，と仮定するならば，型式よりも下位のレベルでも土器の類似がみとめられた，関東南部と関東北西部の各地域内では，各地域間よりも遺跡間の交流が密であったと考えることができる。

ここで示した関東南部地域と関東北西部地域という地域区分は，文様に基づいた各土器群の出現率をセリエーション図によって比較するために，筆者が便宜的に設定したものである。したがって，これをそのまま地域集団と考えることはできないが，地域差の傾向を比較するうえでは有効な単位であろう。当時の，より具体的な地域集団の抽出を試みるためには，今回用いたような施文技法に基づいた各群の組成比だけでなく，複数の属性を重ね合わせて，遺跡間の土器の類似と相異を個別に検討する必要がある。

5 おわりに

以上述べてきたことから，同一土器型式内においても，型式を構成する特定の属性に注目して土器の分類を行ない，各群の出現率を比較することによって，地域差を指摘し得ることが明らかになった。そして，型式学的な立場からは時間的指標と考えられる土器の属性でも，時間幅を区切って考えた場合には，地域差の指標となり得るものもあることを指摘した。さらに，地域差の解釈について，今後の研究の見通しを示した。

型式とは異なるレベルで土器の類似と相異を検討することにより，編年以外の土器研究を試みることが可能になる。これは，山内清男以来の伝統的な縄文土器研究と矛盾する立場ではないと，筆者は考えている。

註

1) 今村啓爾「諸磯ｂ式・ｃ式土器の変遷と細分」『伊豆七島の縄文文化』武蔵野美術大学考古学研究会，1980

2) 鈴木敏昭「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷(再考)」土曜考古，2，1980

3) Ford, J. A. "A Quantitative Method for Dating Cultural Chronology". Pan American Union. 1962. ほかを参照

4) 鈴木公雄「安行系粗製土器に於ける文様施文の順位と工程数」信濃，21—4，1969

図１の出典

1)・2) 羽生淳子「縄文土器の類似度—土器の属性分析に基づく遺跡間の関係復元への新たな試み—」史学，55—2・3，1986，第１図

3) 川島雅人・石橋峯幸・金持健司「多摩ニュータウンNo. 457遺跡」『多摩ニュータウン遺跡　昭和56年度』第３分冊，東京都埋蔵文化財センター，1982，第９図

4) 白石浩之『細田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 23，神奈川県教育委員会，1981，第 28 図

5) 村田一二ほか『北前貝塚』野田市文化財報告第４冊，野田市郷土博物館，1979，第 19 図

6) 市川　修ほか『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第 25 集，1984，図版 108

7) 中島　宏ほか『伊勢塚・東光寺裏』埼玉県遺跡発掘調査報告書26，埼玉県教育委員会，1980，第38図

8) 百瀬新治ほか『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書，原村その５，昭和 51・52・53 年度』1982，図 143

資料（図１の出典に記したものは省略）

市川　修ほか『上南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集，1982

小渕忠秋ほか『稲荷丸北遺跡』ニュー・サイエンス社，1983

久保常晴編『本町田』立正大学文学部考古学研究室調査報告第１冊，ニュー・サイエンス社

黒岩文夫・富沢敏弘『中棚遺跡—長井坂城跡—』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC-Ⅵ），群馬県昭和村教育委員会，1985

甲野　勇・新井　清・持田春吉ほか『川崎市宮崎新鷺沼鷺沼遺蹟発掘調査報告書』川崎市高津図書館友の会郷土史古代班研究部・宮崎古代文化研究会，1966

武部喜充・大賀　健『小仁田遺跡』関越自動車道（新潟線）水上町埋蔵文化財発掘調査報告書，山武考古学研究所，1985

村井美子ほか『二宮遺跡　1976』秋川市埋蔵文化財調査報告書第５集，秋川市教育委員会，1978

和田　哲「八王子市平町縄文前期遺跡」古代，51，早稲田大学考古学会，1968

季刊 考古学　第21号　　1987年11月1日発行
ARCHAEOLOGY QUARTERLY　　定価 1,800 円

編集人　芳賀章内
発行人　長坂一雄
印刷所　新日本印刷株式会社
発行所　雄山閣出版株式会社
〒102　東京都千代田区富士見 2-6-9
電話　03-262-3231　振替　東京 3-1685
◆本誌記事の無断転載は固くおことわりします。
ISBN 4-639-00683-7　printed in Japan